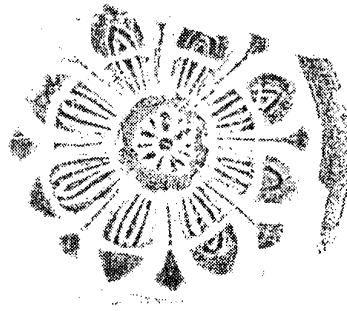


檜原廃寺跡

発掘調査現地説明会資料



檜原廃寺出土の軒丸瓦拓影

1997年7月20日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所在地 京都市西京区榎原内垣外町22
調査期間 1997年6月23日～継続中
調査面積 約490㎡
調査主体 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

1 今までの調査成果（図2）

榎原廃寺は、京都洛西にある長岡丘陵東北端の台地上に位置する。そのため、北・東・南の三方が開け、つい最近まで遺跡から京都市街を眺望することができた。ところで、寺院跡の北側には古道と考えられる山陰街道が、また東側には物集女街道が通っている。

榎原廃寺の発掘調査は、1967年（昭和42年）に宅地造成に先だって実施された。その結果、白鳳時代に建立されたと考えられる八角形を示す瓦積基壇の塔跡をはじめ、回廊跡、中門跡、築地跡などの遺構が発見された。

塔跡基壇の規模は、一辺が5.07m、対辺距離12.7m、現存高1.17mを測り、基壇中央の地下約2mに、塔心礎（一辺約2m、花崗岩製）が据えられていた。この様な八角形の塔跡は、わが国では極めてめずらしい例である。

塔跡を中心に南側には、中門（東西20m、南北11m）と、幅5mの南面回廊及び東側・西側には幅2.4mの築地が巡っていることが確認された。

遺構の配置状況や地形などから、中門・塔・金堂・講堂などが一直線上に並ぶ四天王寺式の伽藍配置であろうと推定された。

創建年代については、出土した軒瓦の年代や塔跡基壇が瓦積で、塔心礎位置が地下式でしかも円形の柱型を彫りくぼめた形式であることなどから、この寺院は7世紀半ばに造営されたものと推定された。出土した瓦は白鳳時代以外にも、奈良時代後半から平安時代前期のものも見受けられた。この時期の寺院は、山背には数カ所で見られるが、遺構の遺存状況も良好で、しかも八角形の塔は発見例の極めて少ない貴重なものである。そのため、1971年（昭和46年）に国の史跡に指定され、現在は史跡公園として整備されている。

1967年の調査以降、発掘調査1回、試掘調査2回、立会調査1回を断続的に行っているが、寺院に関する遺構、遺物の発見はほとんど見られない。ただし、下水道敷設工事に伴う立会調査では、史跡公園の西方において瓦窯かと思われる遺構を確認しており、寺域のすぐ西側でも瓦生産が行われていたことを明らかにした。

またこの立会調査では、寺域の周辺部から檜原廃寺造営以前（弥生～古墳時代）の遺構・遺物、平安時代から鎌倉時代の遺構や遺物を多数検出している。

2 今回の調査で検出した遺構

回廊1 梁間2.4m、桁行柱間2.1mを測る東西方向の掘立柱の回廊である。今回の調査では、7間ほど検出した。建物の北側と南側には、雨落ち溝と考えられる溝が見られる。北側の溝は幅1mで、遺物の量も少ない。溝は、西側へ行くに従って徐々に浅くなり途中で見られなくなる。南側の溝は幅1.6mで、溝内からは瓦が出土している。この溝も北側溝と同様、西へ行くに従って浅くなる。この溝は、新旧2時期ある。

掘立柱建物2 東西5間、南北2間の掘立柱建物である。柱間寸法は、梁間、桁行とも2.3mを測る。建物軸はほぼ真北である。

掘立柱建物3 東西4間、南北2間の掘立柱建物である。柱間寸法は、梁間、桁行とも2.3mを測る。建物軸は、北に対してやや西に振る。

掘立柱建物4 東西4間、南北2間の掘立柱建物である。柱間寸法は、梁間、桁行とも1.8mを測る。建物軸の方向は、掘立柱建物2と近い傾きである。

土壙5 平安時代の土師器、須恵器、二彩陶器、白磁碗などが出土している。

3 出土した遺物

出土遺物の大半は瓦類が占め、土器類は少ない。土器には、土師器・須恵器・白磁・二彩陶器・縄文土器などがある。その他に、鉄釘などが出土している。

4 まとめ

- ① 塔跡から北へ約78mの位置で東西方向の回廊跡を検出した。
- ② 回廊跡は、梁間2.4m、桁行柱間2.1m、軒出1.5mを測る掘立柱建物である。
- ③ 回廊の南側で検出した掘立柱建物は3棟あり、それぞれ時期が異なっている。

掘立柱建物2は、奈良時代後半から平安時代前期、掘立柱建物3は平安時代前期と考えている。

- ④ この寺院は、平安時代中期頃までは営まれていた。

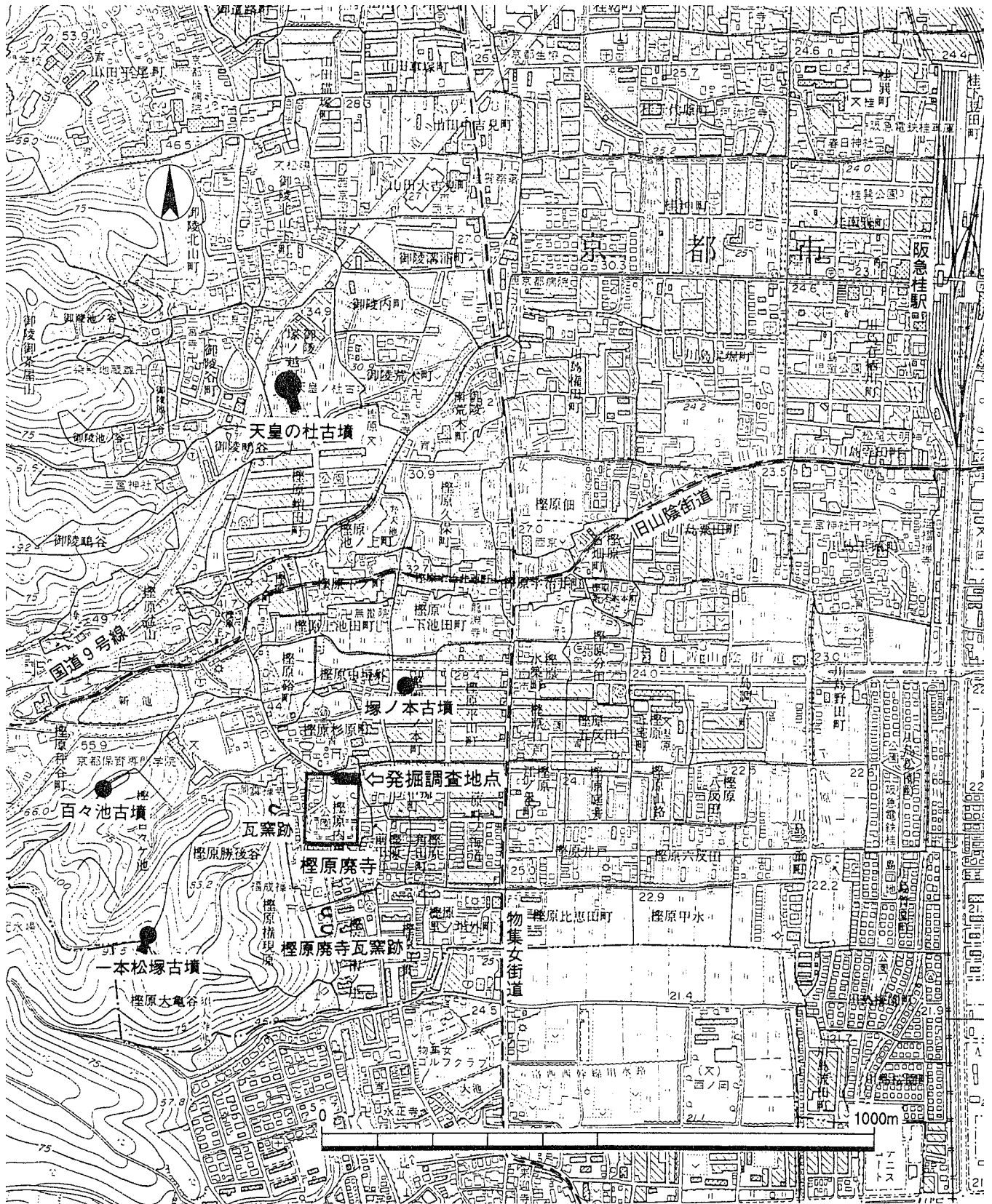


図1 調査地点位置図

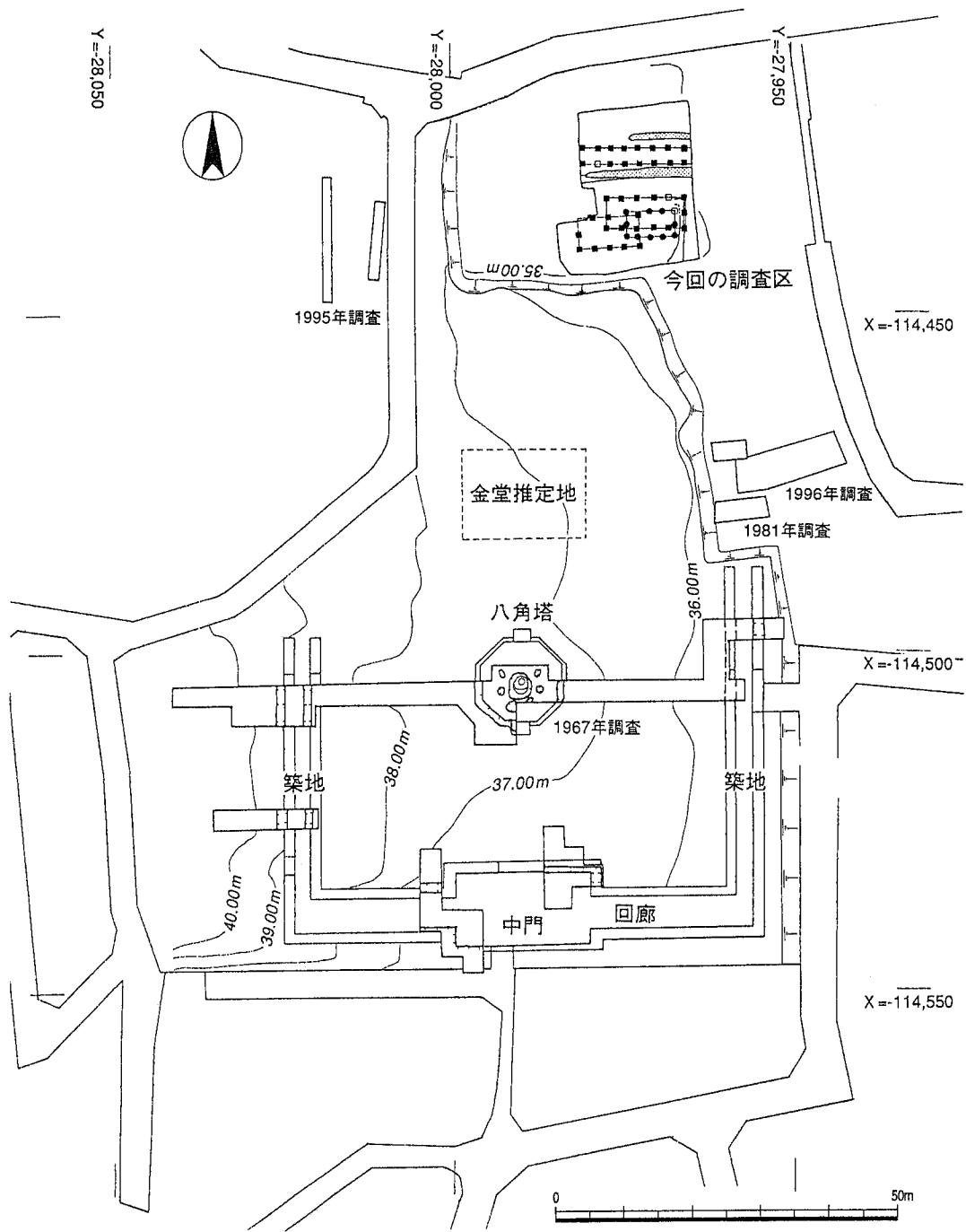


図2 調査区配置図

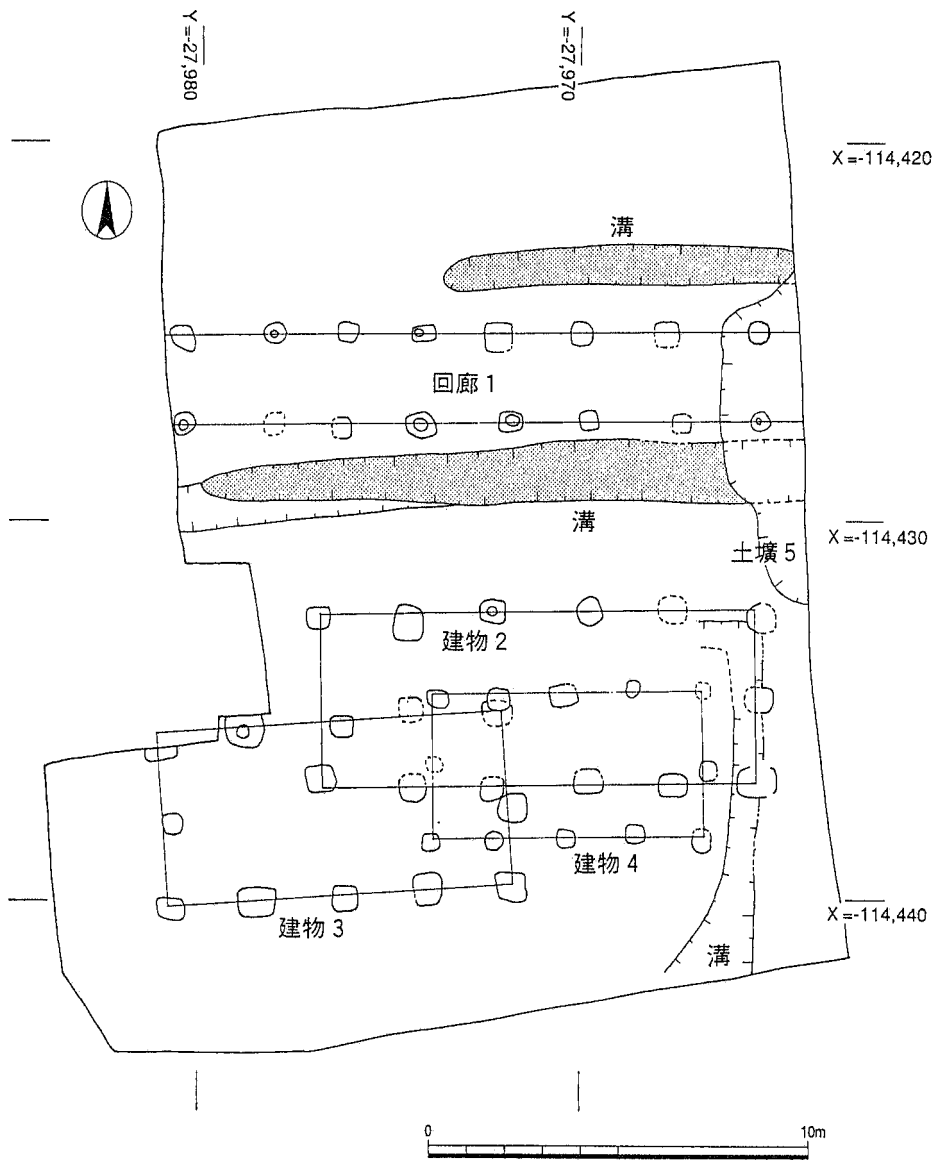


図3 遺構配置図

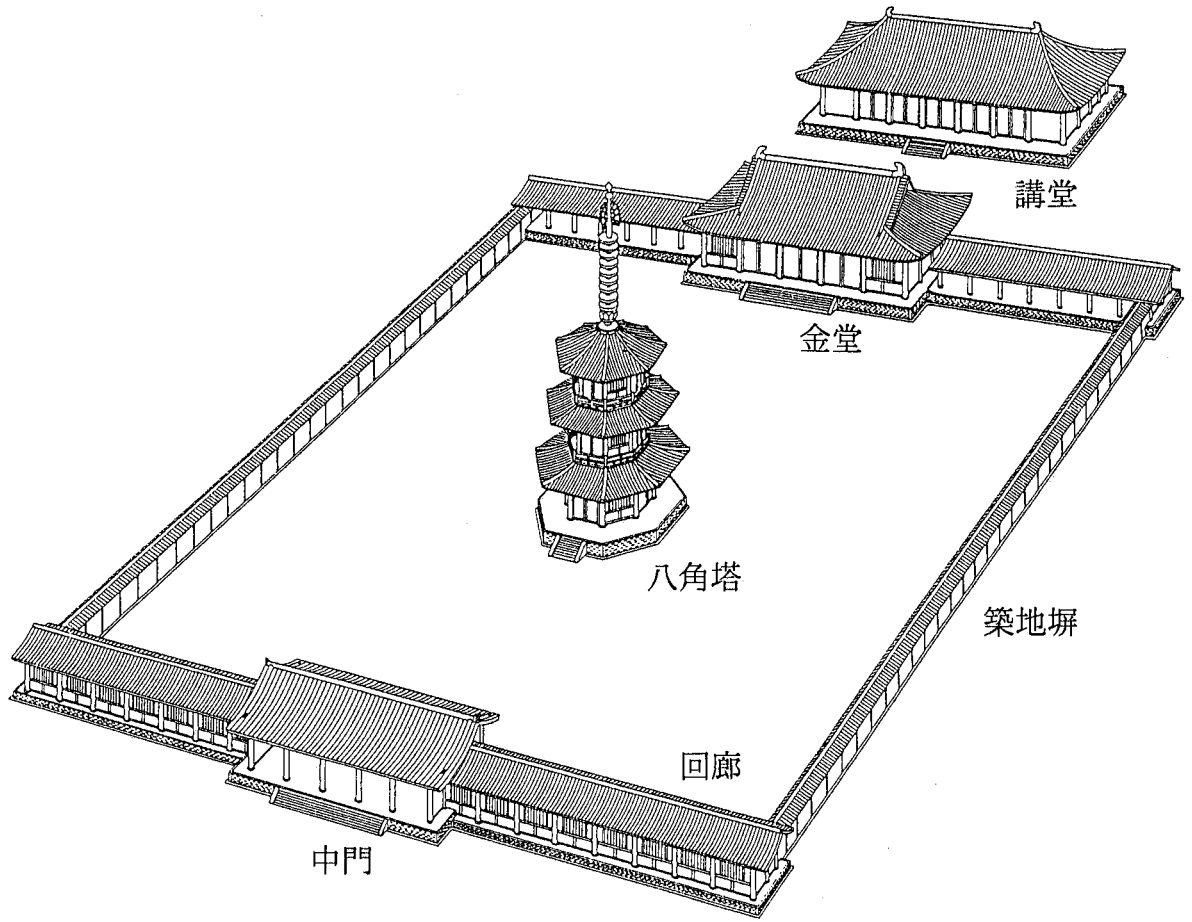


図4 檜原廃寺復元図（1967年発掘当時）『京の古代社寺』より転載

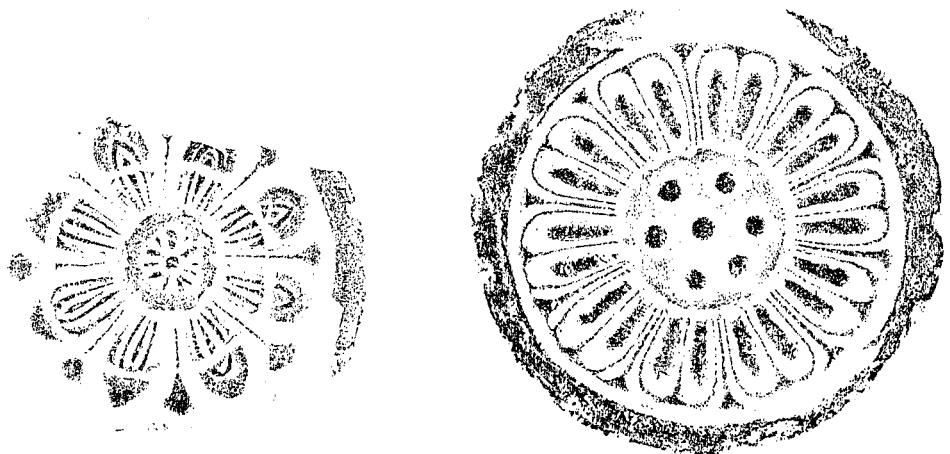


図5 出土軒丸瓦（1／3）